

「跋蒙古字韻」訳注

吉池孝一

ロンドンは大英図書館の Oriental & India Office Collections に、朱宗文による校訂の序(元代の至大戊申・1308年)が付された『蒙古字韻』の写本が所蔵されている。これは現在知られているたった一つのテキストであり、尾崎雄二郎 1962(「大英博物館本蒙古字韻札記」『人文』8, pp.162-180.)の欠筆に着目した研究により清の乾隆年間(1736-1795)に書写されたことが分かっている。刊本は亡佚して伝わらないけれども、清の道光年間(1821-1850)に羅以智という人物が刊本を実際に見たという記録がある。羅氏は目にした刊本の体裁を『恬養齋文鈔』(合衆図書館叢書所収)の第三巻に「跋蒙古字韻」と題して書きとどめた。この一文は現存する写本がどのような性格のものであるかを考察する上で極めて重要な記録である。すでに羅常培・蔡美彪 1959(『八思巴字與元代漢語』科学出版社)により斯界に紹介されているけれども誤植多く省略されている部分もあるため全文を掲載し訳文と注を付すこととした。

〔本文〕

跋蒙古字韻

四庫全書提要存目、蒙古字韻二卷、刻本久佚、是本首尾略闕、餘完善、紙麤墨濁、洵元刻也、不分卷數、其迴避字樣列詣卷首、亦與寫本互異、初歸停雲館、後歸吾里繡谷亭、今爲蕭山張衢情齋所藏、攜置行笈中、余獲假閱一過、蒙古初借用畏吾字、迨國師製新字謂之國字、形如梵書乃梵天伽盧之變體、頒行諸路、皆立蒙古學、此書專爲國字漢文對音而作、在當時固屬通行本耳、蒙古字本有千餘、此書所列僅八百餘字、且字法與今所行蒙古字樣不同、即唐氏稗編、趙氏石墨鐫華、顧氏金石文字記、所載蒙古文比對、亦復不同、參以所見元押銅印文、亦有不合者、考元史、蒙古字其母四十有一、此書先列三十六字、後列歸入喻母者七字、凡四十三母、又相同者三字、按盛氏法書考中載國字四十二母、又載漢字母、去三字增四字、則比對漢文用四十三母、可補史傳所未詳、而此書字法又與法書考不符、恐傳授舛訛、在當時已難畫一矣、韻中上去入三聲附入平韻、視我朝清文無異、韻分十五部、字少故歸併之、非漢韻分部、亦改從蒙古字韻、較之洪武正韻妄爲歸併者有間、存以備一代之圖籍、可也、順帝時、清江杜伯原編五聲韻、「蒙古新字靡不収録、題曰華夏同音」、見陶氏輟耕錄、藏書家儻有秘本、異日更得一見否。

〔訳文〕 []と()は吉池による補

『四庫全書提要存目』に蒙古字韻二卷とある。刻本は逸して久しい。此処にある書は首尾がやや欠けている以外は整っている。紙は粗く墨は濁っており、正しく元刻である。巻数は分けず、「迴避字樣」を巻首に配するところは、写本とは互いに異なっている(注1)。初め停雲館に歸し、後に我が同郷の繡谷亭に歸した。今は蕭山の張衢情齋の所藏となっている(注2)。旅用の書箱に携えていたものを、私が借り受け一読したのである。

蒙古は初めウイグル文字を借り用いていたけれども、国師(パスパ)が新字(パスパ文字)を作るに及び此を国字と称した。形は梵字のようであり、梵天伽盧の変体[文字]である(注3)。[この国字を]諸路(行政単位)に発令公布すると、みな蒙古の学(或いは学校)を起こし

た。この書(『蒙古字韻』)は[その折]専ら国字(パスパ文字)と漢字の対音の為に作られたものであり、当時あっては、もとより通行本の類に属す。蒙古字(パスパ文字)はもともと千余字あったけれども、此の書(『蒙古字韻』)に挙げられているのは僅か八百余字である(注4)。その上、綴りも今行われている蒙古字(パスパ文字)の字形とは異なっている。すなわち唐氏の『稗編』(注5)、趙氏の『石墨鐫華』(注6)、顧氏の『金石文字記』(注7)所載の蒙古文(パスパ文字)と比べると異なっているのである。眼にし得た元代の押印の文字(パスパ文字)に当たってみても合わない所がある。元史によると蒙古字(パスパ文字)の字母は41とある。此の書(『蒙古字韻』)では先ず36字を挙げ、その後に喩母に入るものを7字挙げ、全部で43の字母となっている。[それ以外に]重複するものが3字ある(注8)。盛氏の『法書考』では国字(パスパ文字)の字母を42字載せ、更に漢字を記すための字母を載せ、3字を削り4字増やし、結局、漢字と対応させたもの(漢字表記用のパスパ文字)として43の字母を用いている(注9)。これ(『蒙古字韻』と『法書考』の字母数)により、[元]史の傳の不明な箇所(字母数を41とすること)を補うことができる。また此の書(『蒙古字韻』)の綴り方と『法書考』の綴り方とは一致しない。恐らくは誤訛が伝えられ、当時あっては、字形を一つに律するのは既に難しくなっていたのであろう。韻においては、上去入の3声は平声に付されており、我が朝(清朝)の清文(漢語音を表記した満洲文字)と[両者とも声調の違いは考慮せず音節を構成する単音のみを記し、平声の音節に上去入の音節を合しているところは]異なるところはない。韻は15部に分けられている。これは、字が少ない為に韻を併合したのであり、漢語の韻の分部ではない。また蒙古字の韻(パスパ文字で綴った漢語の韻母の形。書名ではない)に従って改めている。これを『洪武正韻』と比べてみると妄りに併合しているものがありしっくりしない(あるいは、妄りに併合しているものが間々ある)。ともあれ、保存し後日の調査に備えるべき図書である。なお、順帝の時に清江の杜伯原が五聲韻(五聲による音韻の書。書名ではない)を編んだ。そこには、「蒙古新字(パスパ文字)を収録せざるはなく、題して『華夏同音』となす」と記してあったという。このことが陶氏の『輟耕録』にみえる(注10)。[この『華夏同音』なる書が]藏書家の秘本に有るならば、いつの日か一見したいものである。

〔注〕

(1)鄭再発 1965(『蒙古字韻跟八思巴字有關的韻書』国立台湾大学文学院 p.9)では、羅氏は道光年間において写本と刊本の両者をみたとして解釈する。これは何かの誤解であろう。「跋蒙古字韻」では先ず「四庫全書提要存目、蒙古字韻二卷、刻本久佚」とありその直後に「是本首尾略闕、餘完善、紙蠹墨濁、洵元刻也、不分卷數、其迴避字樣列詣卷首、亦與寫本互異」と続く。四庫提要には写本蒙古字韻二卷の体裁が詳しく記されている訳であるから、「亦與寫本互異」という箇所の「寫本」とは四庫全書提要存目で言及された写本のことであり、羅氏は提要で言及された写本の体裁と実際に目にした刊本とを比較したとみるべきであろう。

(2)羅以智は実際に目にした「蒙古字韻」の刊本を“元刻”本としている。紙質などからの判断と思われる。この判断に誤りがなかったかどうかという事については検証する材料を持ち合わせない。しかしながら、この跋の前段には“元刻”本の所蔵者の変遷が記されている。この記述については既に鄭再発(1965)で言及されており、それによると、最初の所蔵者である停雲館は明代中葉の書家文徵明、繡谷亭とは清初の書家蔣深であるという。この所蔵者に関する記載が正しいとしたならば、この刊本の刻年は少なくとも明代中

期以前に遡ることになる。

(3) 「パスパ文字は梵天伽盧の変体文字である」とパスパ文字成立の事情が述べられている。これに類する記述として明代の趙𩇛撰『石墨鐫華』がある。その巻六で「元蒙古字碑」と題してパスパ字蒙古語碑文を紹介しつつ「蒙古字法、皆梵天伽盧之變也」と述べる。おそらく羅以智の記述は『石墨鐫華』に拠ったものであろう。この「梵天伽盧」が何を指すかはなかなか難しいけれども、元代は盛熙明の『法書考』が参考となる。『法書考』卷之二「字源」によると「……嘗覽竺典云；造書之主凡三人、曰梵、曰伽盧、曰倉頡。梵者光音天人也、以梵天之書傳於印土、其書右行。伽盧創書於西域、其書左行。皆以音韻相生而成字、諸蕃之書皆其變也。其季、倉頡居中夏、象諸物形而為文、形聲相益以成字、其書下行。……」（かつて印度の典籍をみた折り次のようにあった。書を造った主は三人。梵と伽盧と倉頡である。梵というのは光音天人のことで、梵天の書を印度に伝えた。その書は右に向かって書き進む。伽盧は西域に於いて書を創った。その書は左に向かって書き進む。両者ともに音韻の相生ずるを以て字と成した[発音の通りに字を綴った]。諸蕃の書はすべてこれらの文字が変化したものである。その時倉頡は中夏にあって、諸物の形にかたどり文様を作った。形と音は互いに助け合い文字となった。その書は下に向かって書き進む。）とある。これは盛熙明自身の考えではなく竺典の引用部分である。その竺典が何であるか明らかではないけれども、文字学という立場からみて興味深い記述である。それはともかくとして、引用された竺典によるかぎり、「跋蒙古字韻」や「元蒙古字碑」で言う「梵天伽盧」の「梵天」は、「梵天が造った書」であり、「伽盧」は、「伽盧が造った書」とであると理解することができる。それでは「梵天が造った書」とは何か。「印度に伝えた」との記述より、印度系の最初期の文字であるブラーフミー文字と考えたい。「伽盧が造った書」の方は、「伽盧」という音形および「西域に於いて書を造った」「左に向かって書き進む」という記述より、カローシュティー文字に間違いはない。これより「梵天伽盧」は「ブラーフミー文字やカローシュティー文字」ということになる。盛熙明『法書考』は、この二種の文字およびその正書法が諸蕃の書(漢字以外の諸族の文字)の基となったとしており、直接パスパ文字と結びつけているわけではない。この点、元代の盛熙明と明代の趙𩇛の理解は異なっていたとおもわれる。趙𩇛は「諸蕃の書」をパスパ文字に置き換え、「梵天伽盧」については「印度系の文字」くらいの意味で理解したに違いない。パスパ文字は主にチベット文字を変形して作ったものであるから「梵天伽盧」を「印度系の文字」ととらえ、パスパ文字を「梵天伽盧之變體」としても趙𩇛にとっては齟齬はない。おそらく清代の羅以智も趙𩇛と同様な理解であったと想像する。

(4) 『元史』(明の洪武三年(1370))のパスパ文字を説明した箇所に「其字僅千餘、其母凡四十有一」とある。『四庫全書總目』にも「其字僅千餘、其母凡四十有一」とある。「跋蒙古字韻」の記述は『四庫全書總目』(乾隆三十七年(1772))によったものであろう。Poppe, N. 1957 (*The Mongolian Monuments in Hp'ags-pa Script*, Second Edition translated and edited by J.R. Krueger, Wiesbaden) は『元史』記載中の「字」とは音節のことであるとし、「その音節数は一千余りで字母数は 41」と理解する。パスパ文字は音節を単位として記されるから、「字」を音節数とするのは穏当なところであろう。中野美代子 1994(『砂に埋もれた文字』ちくま学芸文庫。p.99)はいま一步踏み込んで、「字」とはパスパ文字によって記された漢語の音節であり、「字僅千餘」はパスパ字漢語の音節数であるとする。その音節数であるが『蒙古字韻』によって知ることができる。現存する写本により数え上げると 783。写本は後半部分が欠落しており、他のパスパ文字漢語資料により欠落部分を補う

と 39、合計するとその総数は 822 となる。千余りには達しない。この「僅千餘」という記述が概数の形容ではなく具体的な根拠があるものとするならば、あるいは蒙古語などに特有の音節を含めた数を指すのかもしれないが精査していない。なお、羅以智は「此の書(『蒙古字韻』)に挙げられているのは僅か八百余字である。」とし、刊本蒙古字韻のパスパ字漢語の音節数を記す。この「八百余字」という数は現存する写本蒙古字韻から推定した音節数 822 にほぼ合致する。

(5) 明代の唐順之撰『稗編』卷八十一「蒙古文」の条に「パスパ字百家姓」がある。

(6) 明代の趙嶺撰『石墨鐫華』「元蒙古字碑」の条にパスパ字蒙古語がある。

(7) 清代の顧炎武撰『金石文字記』。石刻史料叢書乙編および叢書集成初編の版によるかぎりパスパ文字資料の掲載はない。

(8) 現存する写本蒙古字韻によると、刊本蒙古字韻の「36 字」とは次のようであったと考えられる。参考までにローマ字の翻字を付す。1. 𠵹_g 見、2. 𠵹_{k'} 溪、3. 𠵹_k 群、4. 𠵹_ŋ 疑、5. 𠵹_d 端、6. 𠵹_{t'} 透、7. 𠵹_t 定、8. 𠵹_n 泥、9. 𠵹_j 知、10. 𠵹_č 徹、11. 𠵹_ŋ 澄、12. 𠵹_ñ 娘、13. 𠵹_b 幫、14. 𠵹_{p'} 滂、15. 𠵹_p 並、16. 𠵹_m 明、17. 𠵹_{f2} 非、18. 𠵹_{f2} 敷、19. 𠵹_{f1} 奉、20. 𠵹_v 微、21. 𠵹_j 精、22. 𠵹_{c'} 清、23. 𠵹_c 從、24. 𠵹_s 心、25. 𠵹_z 邪、26. 𠵹_j 照、27. 𠵹_č 穿、28. 𠵹_č 床、29. 𠵹_{s2} 審、30. 𠵹_{s1} 禪、31. 𠵹_{h1} 曉、32. 𠵹_匣 匣、33. 𠵹_影 影、34. 𠵹_' 喻、35. 𠵹_l 來、36. 𠵹_z 日。「喻母に入るものを 7 字」とは、37. 𠵹_i、38. 𠵹_u、39. 𠵹_é、40. 𠵹_o、41. 𠵹_e、42. 𠵹_ū、43. 𠵹_ī。「重複するもの 3 字」とは、44. 𠵹_{h2}、45. 𠵹_{y2}、46. 𠵹_{y1}。なお、36 字中の非母は原文では 𠵹_{f1} であるけれどもこれを誤とみなし、上では 𠵹_{f2} に改めて提示した。上に挙げた内、9.10.11. と 26.27.28.、17 と 18 は同じ字母であり 4 つ重複することになる。これを削ると結局漢語用の字母は 42 となる。

(9) 『法書考』の「42 字」とは次のとおり。参考までにローマ字の翻字を付す。1. 𠵹_k 葛、2. 𠵹_{k'} 渴、3. 𠵹_g 𠵹_𠵹、4. 𠵹_ŋ 讖、5. 𠵹_č 者、6. 𠵹_č 車、7. 𠵹_j 遮、8. 𠵹_ñ 倪、9. 𠵹_t 怛、10. 𠵹_{t'} 撻、11. 𠵹_d 達、12. 𠵹_n 那、13. 𠵹_p 鉢、14. 𠵹_{p'} 發、15. 𠵹_b 末、16. 𠵹_m 麻、17. 𠵹_c 撻、18. 𠵹_{c'} 捺、19. 𠵹_j 惹、20. 𠵹_v 縛、21. 𠵹_z 若、22. 𠵹_z 薩、23. 𠵹_阿 阿、24. 𠵹_y 耶、25. 𠵹_r 囉、26. 𠵹_l 羅、27. 𠵹_s 設、28. 𠵹_s 沙、29. 𠵹_h 訶、30. 𠵹_' 啞、31. 𠵹_i 伊、32. 𠵹_u 鄔、33. 𠵹_é 醫、34. 𠵹_o 汚、35. 𠵹_q 遐、36. 𠵹_霞 霞、37. 𠵹_f 法、38. 𠵹_𠵹、39. 𠵹_𠵹 惡、40. 𠵹_e 也、41. 𠵹_ū 局、42. 𠵹_ī 耶。この内、39. 𠵹_𠵹 惡は使用例がなくローマ字への翻字も定まっていない。その前にある 38. 𠵹_𠵹 は、39. 𠵹_𠵹 惡と同一の字母であり、誤って書き入れられたものであろう。同様の表を掲載する明初・陶宗儀の『書史会要』(1376 年)に 38. 𠵹_𠵹 に相当する字母はなく総計 41 字となっている。したがって盛氏『法書考』で「42」とするのは「41」とあるべきところである。この 41 の字母は初期に作られた原字と考えられている。これに字母を増減しそれぞれの言語用の字母を作ることになる。さて次に「3 字を削り 4 字増やし」とある。これは漢語に使用しない 25. 𠵹_r 囉、35. 𠵹_q 遐、39. 𠵹_𠵹 惡の 3 字を削り、新たに漢語用の字母として、𠵹_{f2}、𠵹_{s2}、𠵹_{h2}、𠵹_{y2} を増やすということである。これで漢語用の字母数は 42 となり、注(8)で挙げた『蒙古字韻』の字母数と一致することになる。羅氏が 43 とするのは『法書考』の誤に基づいた数字であり、42 とすべきところである。

(10) 明初の陶宗儀『輟耕録』卷十「国字」の項に「杜清碧先生_本、字伯原、有所編五声韻、自大小篆分隸真草、以至於外蕃書、及国朝蒙古新字、靡不収録、題曰華夏同音」とある。